

令和 6 年 5 月 17 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20H02337

研究課題名(和文) 中世禅院を拠点に流通した建築の形態・空間・技法に関する学際的・対外交渉史的研究

研究課題名(英文) An interdisciplinary and historical study on the forms, spaces and techniques of architecture that were transmitted through the medieval Zen temple

研究代表者

野村 俊一 (NOMURA, Shunichi)

東北大学・工学研究科・准教授

研究者番号：40360193

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：コロナ禍のため海外調査は行えなかったものの、オンラインを活用した研究会の開催や国内調査を通じて新たな知見を得た。野村俊一は「唐様」と対となる「和様」の建築様式を、その生成過程から再検討し、自ら編纂した『空間史学叢書』の特集記事としてまとめた。また、建築史学会でシンポジウムを企画し、建築様式の詳細な再検討を行った。溝口は戦国時代の大内館における二階建て建築の系譜を明らかにし、川本は中世禅僧による中国建築知識の受容について考察した。さらに、国内の中世仏教建築の実態調査を進め、多くの情報収集を行った。特に、愛知・鳥取・島根・熊本の建造物を中心に、内部空間の意匠や技法に関する情報を収集した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的意義は、東アジア木造文化圏という包括的な視座のもと、「唐様」と「和様」の概念的再検討から、日本中世建築様式の再評価とその背景の理解が進捗したことにある。野村俊一の「和様」をめぐる一連の研究は、「唐様」との対比により、日本独自の建築様式の展開を浮き彫りにした。また、溝口と川本の研究は、戦国時代や中世の建築技術と中国からの知識受容の関係性を明らかにし、建築史に新たな視点を提供した。また、愛知、鳥取、島根、熊本などの中世における建造物に関する情報が、中国建築との影響関係のもと包括的に、かつ建築様式論の観点からより詳細に解釈することが可能となった。

研究成果の概要(英文)：Despite the inability to conduct overseas surveys due to the COVID-19 pandemic, new insights were gained through online research meetings and domestic investigations. Shunichi Nomura conducted a historical study on the "Wayo" architectural style, which stands in contrast to the "Kara-yo" style, and compiled his findings in a special issue of the "Chronicles of Spatial History." Additionally, he organized a symposium at the Architectural History Society to conduct a detailed examination of Wayo architecture. Mizoguchi clarified the genealogy of two-story buildings in the Ouchi Residence of the Sengoku period, while Kawamoto examined the reception of Chinese architectural knowledge by medieval Zen monks. Furthermore, substantial information was gathered through field surveys of medieval Buddhist architecture in Japan. These surveys focused on the internal design and techniques of buildings, particularly in Aichi, Tottori, Shimane, and Kumamoto.

研究分野：建築史

キーワード：禅院 禅宗様 山水 建築

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

科学研究費助成事業での研究目的は、中世禅院を拠点に流通した建築の諸情報やその後の解釈について、中国での事例をも視野に検討するものである。しかし、本事業実施の期間は、残念ながらコロナ禍の時期と完全に被ってしまい、海外調査が困難な状況が続いたため目的の変更を余儀なくされた。

そのようななか、現地での建造物調査こそ行えなかったものの、オンラインを活用した研究会の開催のほか、国内調査を通じて新たな知見を得た。とくに野村は、「唐様」と対となる「和様」の建築様式が生成した歴史こそを再検討し、『空間史学叢書』(野村俊一編『聖と俗の界面』岩田出版、二〇二一年)の特集記事としてまとめたほか、建築史学会において「和様」を中心に建築様式をあらためて問うシンポジウムを企画し、詳細な検討を行うことで一定の成果を得た。今後、これらの成果を包括し書籍としてまとめる予定であるが、本報告書は、先に『空間史学叢書』紙上で世に問うた和様の建築史学史に関する内容の一部を抜粋し公開するものである。「唐様」にとどまらず「和様」においても、本事業の一テーマとなる中国大陆との影響が看過できない状況があった。

2. 研究の目的

そもそも「和様」とは何か。『日本国語大辞典』(第二版)では「鎌倉時代に中国大陆から輸入された建築様式である大仏様(天竺様)・禅宗様(唐様)などに対して、平安時代以前から日本に行なわれてきた建築様式」とされ、中世には「日本様」と呼ばれていた。建築史学を創始した伊東忠太らにより鎌倉時代の様式概念の一つとして認識され、戦後、太田博太郎が「大仏様」「禅宗様」とともに定義を明確にすることで中世の三大様式概念として確立された、しかし、以降も多くの研究者に継承されてきたものの、各建築史家による和様の説明には、歴史的建造物や様式のはじまり、時代別・地域別の類型区分、中国建築との影響関係などに差異が見られるのだ。

以上をふまえ本稿は、明治期以降の主要な研究を整理し、和様建築をめぐる日本建築史の既往研究をレビューすることを目的とする。和様という言葉をめぐる各建築史家の理解や試行錯誤を、時代区分と併せてまとめ、和様、大仏様、禅宗様のほかこれらの折衷に対する理解も一部で再検討した。本報告書ではその中から太田に関するものを掲載する。なお、図表は割愛した。

3. 研究の方法

様式概念への言及には時代ごとの傾向があり、戦前から戦後にかけて折衷という建築的現象の類型化が試みられたが、近年ではその動きが沈静化し、すべてを和様として単純化する動きすら見られる。また、和様の研究史は時代とともに変化し続けており、この言葉が中世の建築を類型化する概念に留まらず、日本固有の様式や風習を表す広義の意味も持つこともあった。併行して、今に至るまで建築史家は日本の建築の「日本化」をめぐる論じることがしばしばあり、比較対象として中国の事例が取りざたされることもあった。

以上の建築史学上の事象をも考慮しながら、本稿では、紙幅の関係から、建築の様式論に多大な影響を与えた太田博太郎の事例を中心に、彼の著作と取り上げた事例の再検討から紐解きたい。

4. 研究成果

「和様」・「大仏様」・「禅宗様」は、今も使用される日本中世建築の基礎的な様式概念である。第一章で触れたとおり、後者二つは関野貞が『工業大辞書』ではじめて触れた言葉で、のちに太田博太郎(一九一二 - 二〇〇七年)が「天竺様・唐様の名称について」(一九五五年)で「天竺様」を「大仏様」へ、「唐様」を「禅宗様」へと意図的に改めたことが普及の背景にある。

この論考の発表からさかのぼること八年前、太田は『日本建築史序説』(以下『序説』)を上梓した。全体を貫く通史叙述の困難さが謳われるなか、『序説』は長いあいだそのベンチマークのひとつとして君臨してきた。幾度も版を重ねたことでも有名で、一九六九年の増補新版から、彼の没後に出版された二〇〇九年の増補第三版まで、増刊のたび末尾の文献目録が拡充し、『序説』の価値を長らく担保してきた。

では、本文にまったく手が加えられてこなかったのかというと、実はそうではない。本稿が注目する様式概念も随時アップデートされてきたのだ。結論から言えば、中世の建築をめぐる晩年の太田博太郎は、先の三様式のほかに「新和様」と「折衷様」という様式概念のみを用いるようになった。しかし、ここに辿り着くまでに、じつに複雑な紆余曲折を経てきたのである。本章では建築様式をめぐる太田の試行錯誤を、まずは『序説』の変遷を手がかりにみてみよう。

(1) 『日本建築史序説』にみる和様とその類型

『序説』第一版

一九四七年に発行された『序説』第一版で、太田は「大陸建築」の「日本化」について大きく二つの時代に区分して叙述する。一つが、仏教が伝来した飛鳥時代から、唐の影響を強く受けた奈良時代を経て、大陸的なものが「日本化」した平安時代までの時代。そしてもう一つが、大陸

より「天竺様」が移入される契機となった南都焼討から、「唐様」が移入された時期を経て、「折衷様」が成立した鎌倉時代後半にかけての時代である。

後者の「日本化」をめぐる、太田は「和様」をキーワードにその変化の追跡と類型の検証を試みる。それによると、飛鳥・奈良時代にその源流が伝来し、平安時代以降に成立した「和様」は、保守的伝統をもつ奈良の工匠により育まれてきた。しかし、のちに沈滞するに至ると、やがて「天竺様」の自由奔放な手法から大きな刺激を受け、伝統的手法のうちに眠っていた「建築家」を覚醒させる。形式主義の脱却と自由な創作活動の可能性を開き、「更生したる和様」が中世建築界の主流になったという。

この「更生したる和様」に、いくつかの類型が派生する。一つ目は、南都と瀬戸内海沿岸諸地域に誕生した類型で、南都の工匠たちが祖父の時代から続いた和様に、天竺様の皿斗・木鼻・棧唐戸などの装飾的細部を取り入れた「新しい和様」＝「南方新和様」。二つ目が、京都以東でやや遅れて誕生した類型で、のちに唐様の輸入が起こることで中備斗拱・木鼻・拳鼻・虹梁・持送・棧唐戸などを採用した「別の新しい和様」＝「北方新和様」。そして三つ目が、「南方新和様」に唐様の手法をさらに取り入れた「折衷様」である。

『序説』増補新版

『序説』第一版の公刊から数えて二二年後となる一九六九年、『序説』増補新版が続刊された。第三版までのベースとなったもので、第一版と比べると、同一書名のものとは思えぬほどかなりの変更が加えられた。そして、肝心の「和様」をめぐる解釈にも、いくつかの変更が生じている。

様式をめぐる大きな変更点は、「南方新和様」と「北方新和様」という言葉が消え、三様式の折衷過程がより詳細に描かれるようになったことである。その手始めとして太田は、「奈良の和様」と「京都の和様」を掲げる。

「奈良の和様」は、文字通り奈良を中心に展開した和様を意味する。鎌倉時代の南都六宗の復興時に多く芽生えたもので、天平の伝統を踏襲しながらも、「伝統様式に立ち、新しい時代にふさわしいもの」として位置づけられる。具体的には、「大仏様の細部を採り入れて、新感覚を出したもので、大仏様の木鼻・棧唐戸・皿斗といった意匠のほか、貫といった構造が用いられたものとする。太田はその萌芽を興福寺北円堂に見出し、興福寺五重塔・東金堂を代表例に挙げる。

時代が下ると、和様のなかに大仏様がいつそう採用されるようになる。その代表例として太田は、一三世期中葉以前に造営された元興寺極楽坊禅室および本堂、法隆寺東院礼堂、唐招提寺鼓楼、長弓寺本堂、靈山寺本堂、薬師寺東院堂を挙げ、奈良から山陽道・瀬戸内海沿岸地方への影響を説く。そして、のちに禅宗様が普及すると、その細部も和様に採用されていく。太田はその代表として、一三世期後半以降に創建された和歌山の松生院本堂や長保寺本堂を挙げ、詰組、火打梁、尾垂木尻の架構、大瓶束、虹梁の持送組物、木鼻などの細部がふんだんに取り入れられたものと説く。これらの類型をひっくるめて「南都和様」とも別称した。

いっぽうの「京都の和様」は、「藤原時代の伝統」を直接継いだ「木割りのやや細い、繊細さを持ったもの」で、「洗練された感じのもの」であった。その源流を石山寺多宝塔・一乗寺三重塔・金剛寺多宝塔・大報恩寺本堂といった兵庫・大阪・京都の事例に見出すほか、その特徴を西明寺・長寿寺・金剛輪寺といった京都以東の、すなわち京都や滋賀の事例に見出す。この類型を太田は「京都和様」とも別称した。

さらに、新様式の摂取の程度にしたがって、太田は新たな類型を提示する。一つが、木鼻や棧唐戸など、部分的な細部にだけ影響を与えた「和様新派」。かつて関野貞が提唱した類型だ。もう一つが、虹梁の形、虹梁の持送組物、組物の左右の拡がり、詰組、大瓶束などの構造的手法までを大々的に取り入れた「折衷様」である。そして、木割の太さや関与した工匠を手がかりに、後者の「折衷様」を「南都和様」の系譜上に位置づけた。

この「折衷様」の代表として、太田は松生院本堂と鶴林寺本堂を強調し、外陣内部の架構に大きな特徴を指摘する。他者の既往研究では観心寺本堂や鶴林寺本堂を代表に「観心寺様」と別称していたが、太田はこの説との差別化を図ったことになる。

(2) 「折衷様」の評価とその試行錯誤

再定義される「奈良の和様」と「京都の和様」

このように、同一書名の通史に限っても、再版にあたって内容に大きな変化が生じている。二二年のあいだに、一体どのような思考の変化があったのか。この変化は、『序説』以外の太田による論考や、太田に影響を与えた既往研究と照らし合わせることで、より立体的に理解することができる。紙幅の許す限り、いくつかのキーワードとともに見てみよう。

まず、『序説』第一版の「南方新和様」と「北方新和様」という言葉は、その類例を服部勝吉の論考に認めることができる。第二章でも見たとおり服部によれば、大仏様に刺激されて進行した奈良地方の和様が起ると、やがて大仏様の衰運に乗じてその手法や様式系統を併せた「南方和様」が生じ、他方で京都を中心に王朝の余流を受けつつ展開した「北方和様」が生じたという。いずれも『序説』第一版の定義と類似しているが、のちにも触れるとおり、「唐様」と「北方新和様」との関係をめぐる解釈に若干の差異も見受けられる。

しかし、のちに太田はこの言葉の使用をやめ、独自の展開を模索する。『序説』増補新版の「奈良の和様」と「京都の和様」という言葉は、その試みを示す鍵概念でもあった。しかし、その内容はいささか複雑で、そのさまは『序説』以外の論考でも、折衷の解釈をめぐる紆余曲折として

みることができる。

では、その紆余曲折はどのようなものだったのか。まず注目したいのは、『序説』増補新版よりも先んじて一九五七年に発表した『建築学体系』(以下『体系』)の第一版である。このなかで、「和様の伝統とその発展」という章題のもと、「奈良の和様」と「京都の和様」という類型をはじめて提示する。しかし、その内容や全体の構図は、『序説』増補新版と大きく異なる。

『体系』第一版で説かれる「奈良の和様」は、南都六宗の再建時に天平の伝統的手法を用いた時代のものから、大仏様の木鼻・皿斗・棧唐戸といった装飾的細部を取り入れた時代のものを指す。いっぽうの「京都の和様」は、前代の様式をそのまま保持したものを指し、東寺の諸門・大報恩寺本堂・蓮華王院本堂・広隆寺桂宮院といった、文字通り京都に現存するものが事例となる。しかし、鎌倉時代後半から室町にかけて京都で禅院が興隆すると、その地位を譲らざるを得なくなり、さらには、木鼻・肘木の曲線・虹梁の形・海老虹梁・棧唐戸・花頭窓・実肘木・拳鼻といった、禅宗様の装飾的細部を取り入れた和様が興隆するに至ると説く。

このように、『体系』第一版で太田は、和様の類型を奈良と京都という場所に局限して叙述する。そのためもあってか、禅宗様を取り入れた和様と、京都を舞台とする和様の叙述に苦慮しているようにも見える。三様式が折衷していくプロセスについて、とくに京都での禅宗様の展開をめぐる解釈が、『序説』増補新版の内容と異なることに注意したい。

「観心寺様」批判と様式の単純化

次に留意したいのが、「観心寺様」に対する太田の評価とその変化である。引き続き『体系』第一版をひもとくと、ここで太田は「奈良の和様」と「京都の和様」に対して、大仏様と禅宗様の要素を構造にまで大きく取り入れた「地方における和様」を位置づける。そして、その延長上に「観心寺様」を位置づけ、最たる事例に松生院本堂を挙げる。

太田は一九六八年に公刊された『体系』改訂増補版で、ついに「観心寺様」をすべて「折衷様」に置き換える。さらには、のちの一九七七年に刊行された『文化財講座日本の建築3 中世』「概説」(以下「概説」)に至ると、基底となる三様式の細部を整理するとともに、観心寺本堂に代表される「観心寺様」という様式概念を明確に批判するようになる。架構と装飾のなかに大仏様と禅宗様を取り入れたものを「折衷様」と定義し、引き続きその代表に松生院本堂を掲げ、この様式名を用いる方が適切であるとまで説くようになるのである。

「和様新派」という言葉の取り扱いにも変化が生じる。先にも触れたとおり、太田は『序説』増補新版で、関野に倣うことで、外来の細部意匠を部分的に摂取したものを「和様新派」と呼び、「折衷様」と区別した。しかし、のちの「概説」では、大仏様のみを取り入れた和様を「和様新派」あるいは「新和様」と併称し、さらに「禅宗様」を取り入れたものを「折衷様」と呼ぶようになる。かつ、「奈良の和様」と「京都の和様」、「南都和様」と「京都和様」のほか、「地方における和様」という言葉も消失する。

やがて、「新和様の建築」(一九八四年)では、ついに「和様新派」という言葉も用いられなくなり、折衷を表す建築様式として「新和様」と「折衷様」のみが残るに至った。このように太田は、複雑かつわかりづらい鎌倉時代以降の和様とその折衷の系譜を、紆余曲折しながらも漸次単純化してきたのである。

(3) 「日本化」と和様の物証

冒頭で挙げた一九五五年の「天竺様・唐様の名称について」のなかで、太田が三種の様式を再定義したことは先にも触れたとおりである。「天竺様」は「インド風」という意味になってしまいうし、「唐様」は「シナ風」と理解すると、平安時代のものと中世後半以後のものとの区別がつかなくなる。できるだけわかりやすくするために変更した、というのがその理由だった。

しかし、この論考で太田は「和様」に特別な変更を加えていない。そればかりか、ほかの二様式の再定義と比べて少々歯切れが悪い。「和様」は「大仏様」や「禅宗様」の移入以前に存在したものであるという印象で、「平安朝の建築」は該当するものの、奈良時代の「シナ風の建築」が該当するか否かは判断が難しいという。二つの新様式に対して他律的に理解されるのみで、かつその時代区分や概念の再定義に留保が加えられたのである。

では、外来様式が移入される鎌倉期以前において、太田は「和様」あるいは「日本化」の現象をどのように理解したのか。そのヒントとなるのが、大陸的なものが「日本化」したという、飛鳥時代から平安時代にかけての叙述である。

『序説』第一版によれば、飛鳥時代に到来した「大陸建築の影響」は奈良時代にもみられ、神社本殿の形式にも影響を与えるほどだった。しかし、「伝統的なものに対する愛着」も強く残り、建築意匠の「日本化」が進行した。太田はその特徴を「誇張に陥らない美しさ」と「優美さ」に求める。

この「日本化」は鎌倉時代以降も持続した。太田は、飛鳥時代の建築と唐様との類似を指摘する。隅の間と中の間との差異がみられる平面や、急な屋根勾配といった屹然とした「強い表現」が、時代が下るに従って次第に和らげられたという。そして、次のように述べる。

支那の建築が、人工的に造り上げられたものとして、その存在を強く示すことを意図しているのに反し、日本の建築は人工的に造られたものであるにもかかわらず、あたかも、自然のうちに、ひとりだけで出来上がったものでもあるかのやうに、つゝまじやかな存在として、自己の存在を強く示さうとしないことを思い合わすとき、大陸的なものから日本的なものへ

の推移の一つの現れと見ることも出来よう。

支那と日本、人工と自然、大陸的なものと日本的なもの。太田は「日本化」という現象すべてを観念的に把握することは困難であると断りを入れながらも、このような二元論のもと、非機械論的な自然観にも依拠しながら、「日本化」というダイナミズムの把握を試みた。

そして、この「日本化」という現象と、「和様」という様式の軌跡が、一部オーバーラップするかのようには捉えられている。太田が『序説』第一版で、「和様」を飛鳥・奈良時代にその源流が伝来し、平安時代以降に成立したものと説いたことは先述のとおりであるが、「鎌倉初期の建築と工匠」(一九八〇年)では、「奈良時代までに伝来した唐の様式を伝えたもの」と説き、その源流へとより漸近する。いずれにせよ、三様式が出揃う鎌倉時代よりも前の時代まで、和様の連続性を謳っていることは確かである。

他方で留意したいのは、「日本化」の実態について、建築部材の具体的な変化からも解き明かそうとしたことである。

『序説』第一版では、日本化の結果生じた構成要素を、檜皮葺、床、条坊の呼称法の簡明化、装飾の簡略化、野屋根の発生に求める。ここを起点に、『体系』第一版では各々の具体例の叙述が充実する。建物の梁行と桁行との比率の変化に触れるほか、とくに床および板敷の発生に焦点を当て、作法の日本化と礼堂の発生との密接な関係を指摘する。

なお、和様と床との関係を考えるにあたり、転ばし根太で床を張り、周囲に簀の子縁が取り付く平等院鳳凰堂について、水平線が強調されることを理由に、太田が和様の初期例に挙げたことは留意されよう〔太田ほか一九九六〕。

(4) 誰が建築の意匠を決めたのか

太田は「和様」の建築意匠を決定した主体にも言及する。留意したいのは、「奈良の和様」および「京都の和様」の二派が発生した背景について、工匠との関わりや集団での営為に求めていることである。

「建築と工匠」(一九六二年)では、「奈良風(奈良の和様)」および「京都風(京都の和様)」を担う存在として、それぞれ南都の寺工と京都の官僚建築家群を充てる。しかし、建築の様式を最終的に決定したのは、これらの工匠ではなく、院やその近臣、重源のような実力者など、別の立場の者だったと指摘する。「鎌倉初期の建築と工匠」(一九八〇年)では、その特権的な立場として新たに別当が加えられ、さらに「新和様の建築」(一九八四年)では、別当や工匠だけではなく僧侶一般の存在をも重視する。

かつて太田は、『序説』第一版で、伝統的手法のうちに眠っていた主体に「建築家」をあてがった。その書きようは、建築の設計主体を一人の建築家像に擬える、いわゆるモダニズム史観に則ったものだったと言える。しかし、建築は一人で制作できるものでは決してなく、共属的な集団によりはじめて可能な巨大な構築物であることは言うまでも無い。のちに太田は、文献の読解のもと、この集団の利害関係者を複数あぶり出し、かつて抱いていた単一の建築家像を、具体的かつ複数の成員へと解きほぐしていく。この眼差しは、もはや唯物史観に依拠する限定的な工匠像のみに留まってははいない。建築の実務を担う制作者だけでなく、ユーザーやクライアントといった建築の受容者をも包括した、建築が成立しうる多様かつ複雑な場を志向している。

併行して、具体的な遺構の検討をもとに、建築の類型を時代と地域をふまえながら試行錯誤していく。太田の様式史観は、かつて観念的に謳われたモダニズム史観に則った仮説が、文献とモノ資料をもとにした実証主義のもと、莫大な既往研究を『序説』の巻末で飲み込みながら、随時アップデートされていったのである。

<引用文献>

- ・太田博太郎『日本建築史序説』第一版(彰国社、一九四七)
- ・太田博太郎「天竺様・唐様の名称について」『建築史研究』(彰国社、一九五五)
- ・太田博太郎ほか『建築学大系4』(彰国社、一九五七a)
- ・太田博太郎「禅宗様の細部とその和様への影響」(『中世の建築』彰国社、一九五七b)
- ・太田博太郎「建築と工匠」『世界美術全集 第六巻』(角川書店、一九六二)
- ・太田博太郎ほか『改訂増補建築学体系4』(彰国社、一九六八)
- ・太田博太郎『日本建築史序説』増補新版(彰国社、一九六九)
- ・太田博太郎「概説」(『文化財講座日本の建築3中世B』第一法規出版、一九七七)
- ・太田博太郎「鎌倉初期の建築と工匠」『日本古寺美術全集 第五巻』(集英社、一九八〇)
- ・太田博太郎「鎌倉時代中期の南都建築界」(『信濃』三三、一九八一)
- ・太田博太郎「新和様の建築」『全集日本の古寺 第巻』(集英社、一九八四)
- ・太田博太郎『日本建築史序説』増補第二版(彰国社、一九八九)
- ・太田博太郎ほか編著『太田博太郎と語る 日本建築の歴史と魅力』(彰国社、一九九六)
- ・太田博太郎『日本建築史序説』増補第三版(彰国社、二〇〇九)
- ・鈴木嘉吉「太田博太郎先生を偲んで」(『建築史学』四九、二〇〇七)
- ・「追悼太田博太郎先生を偲んで」(『文建協通信』八八、二〇〇七)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計20件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 川本慎白	4. 巻 275
2. 論文標題 室町仏教と唐物	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 84-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 鈴木智大	4. 巻 -
2. 論文標題 『参天台五臺山記』にみる建築用語	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 319-320
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 何 戌琪,野村俊一	4. 巻 -
2. 論文標題 摂関期の土御門殿における行幸について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 357-358
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 張 維,野村 俊一	4. 巻 -
2. 論文標題 禅学大系本「授戒日規」の成立年代について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 321-322
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野村俊一・箱崎和久・溝口正人・富島義幸・黒田龍二	4. 巻 77
2. 論文標題 和様 建築の再検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 建築史学	6. 最初と最後の頁 73-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野村俊一	4. 巻 4
2. 論文標題 「和様」の再検討とその基礎的研究：諸種の「和様」と日本建築史	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 空間史学叢書4 聖と俗の界面	6. 最初と最後の頁 193-196
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野村俊一	4. 巻 4
2. 論文標題 伊東忠太・関野貞 建築史学黎明期の様式概念：諸種の「和様」と日本建築史	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 空間史学叢書4 聖と俗の界面	6. 最初と最後の頁 197-215
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野村俊一	4. 巻 4
2. 論文標題 天沼俊一・服部勝吉 標本と生命の様式史：諸種の「和様」と日本建築史	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 空間史学叢書4 聖と俗の界面	6. 最初と最後の頁 216-229
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野村俊一	4. 巻 4
2. 論文標題 太田博太郎 更新され続ける通史と様式：諸種の「和様」と日本建築史	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 空間史学叢書4 聖と俗の界面	6. 最初と最後の頁 230-245
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江原正司、野村俊一	4. 巻 -
2. 論文標題 仙台藩涌谷における幕末館下絵図の年代推定と武家地の居住状況について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 何 成琪、野村俊一	4. 巻 -
2. 論文標題 摂関期における貴族住宅の客亭について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 溝口正人	4. 巻 第101冊
2. 論文標題 近世武家居館の2階建て御殿と園池 建築と庭園の近世的展開	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 奈良文化財研究所学報 研究論集19 『近世庭園の研究』	6. 最初と最後の頁 280-303
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岡田侑也・向口武志・溝口正人	4. 巻 -
2. 論文標題 外部空間との関係からみた大名家江戸上屋敷の大書院の平面	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本建築学会関東支部研究発表会 優秀研究報告集	6. 最初と最後の頁 4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川本慎自	4. 巻 715
2. 論文標題 中世禅僧と造営・土木知識	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本史研究	6. 最初と最後の頁 46-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川本慎自	4. 巻 263
2. 論文標題 夢窓派の応永期	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 28-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川本慎自	4. 巻 19
2. 論文標題 『五岳疏 (艸+藁)』について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 115-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塚本鷹充	4. 巻 4
2. 論文標題 貫休「羅漢図」の時空 - 禅月大師「応夢羅漢図」と伝播する聖地 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 空間史学叢書4 聖と俗の界面	6. 最初と最後の頁 149-191
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 何 成琪、野村俊一	4. 巻 2020(建築歴史・意匠)
2. 論文標題 摂関期における土御門殿の唐庇について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 江原正司、野村俊一	4. 巻 2020(建築歴史・意匠)
2. 論文標題 近世・近代における城下町白石の用水路とその変遷について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山崎有生、野村俊一	4. 巻 2020(建築歴史・意匠)
2. 論文標題 中世石清水八幡宮の若宮遷座における神体・仏像の配置について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本建築学会学術講演梗概集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 川本慎自
2. 発表標題 三国伝記と夢窓国師
3. 学会等名 鎌倉禅研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野村俊一
2. 発表標題 和様 建築の再検討
3. 学会等名 建築史学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川本慎自
2. 発表標題 中世禅僧と造営・土木知識
3. 学会等名 日本史研究会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川本慎自
2. 発表標題 宋学与日本中世の禅宗寺院
3. 学会等名 光啓・東亜史学前沿（上海師範大学）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 野村俊一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 216
3. 書名 伝達と変容の日本建築史 : 伝わるかたち伝えるわざ	

1. 著者名 海野聡	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 264
3. 書名 森と木と建築の日本史	

1. 著者名 野村俊一・空間史学研究会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩田書院	5. 総ページ数 304
3. 書名 空間史学叢書 4 聖と俗の界面	

1. 著者名 前田育徳会尊経閣文庫編、末柄豊・川本慎自解説	4. 発行年 2021年
2. 出版社 八木書店出版部	5. 総ページ数 272
3. 書名 尊経閣善本影印集成76 蔗軒日録・盲聾記	

1. 著者名 塚本 磨充 (共編)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 520
3. 書名 コレクションとアーカイヴ 東アジア美術研究の可能性	

1. 著者名 野村俊一、空間史学研究会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩田書院	5. 総ページ数 228
3. 書名 まなざしの論理	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	川本 慎自 (Kawamoto Shinji) (30323661)	東京大学・史料編纂所・准教授 (12601)	
研究分担者	塚本 磨充 (Tsukamoto maromitsu) (00416265)	東京大学・東洋文化研究所・教授 (12601)	
研究分担者	溝口 正人 (Mizoguchi Masato) (20262876)	名古屋市立大学・大学院芸術工学研究科・教授 (23903)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鈴木 智大 (Suzuki Tomohiro) (60534691)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・主任研究員 (84604)	
研究分担者	海野 聡 (Unno Satoshi) (00568157)	東京大学・大学院工学系研究科（工学部）・准教授 (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関